戦争の時代を生きた少年たち

田嶋　一

妹尾河童著『少年H』（上下、講談社、一九九七年）が話題になっています。私も一読して、深い感銘を受けました。この本は、作者の少年時代の記録です、妹尾氏は一九三〇年生まれ。三十年代に生まれた人たちは、ちょうど長い戦争の時代に少年期をおくっています。この本には、少年の目から見た戦時下の社会のようす、大人たちや、子どもたちの生き方、家族や学校のことなどが等身大の語り口で語られています。

本書を読みながら、私には**高史明著『生きることの意味』**（筑摩書房、一九八四年）、**山中恒著『ボクラ少国民』**（辺境社、一九七四年）に描き出された少年たちのことがしきりに思い起こされました。そこで、戦争の時代を生きた少年たち、

というテーマで、この三人の人たちの少年期を取り上げてみたいと思います。三人の少年たちにとって、八月は、敗戦という大きな事件に遭遇した月でした。そういう意味でも、このテーマは八月号に取り上げるのにふさわしいと思います。

妹尾河童著『少年H』は、著者初の書き下ろし長編小説、ということになっていますが、おそらく記憶の曖昧な部分を想像によって付け加えたので小説と銘うったのだと思います。内容は完全に妹尾さんの少年時代の自伝です。表題が少年Hとなっているのは、妹尾少年が、友達からHとよばれていたため。その由来は、イニシャルのH（妹尾さんの本名は肇）を母親が編み込んでくれたセーターを着ていたからです。

妹尾さんは一九三〇年に神戸に生まれています。父親は広島県の農村から神戸にでてきて洋服店で修行をし、親戚の娘だった母親と結婚して神戸で妹尾洋服店を開きました。母親は神戸にでてきてから熱心なクリスチャンになり、父親もその影響で信仰を持つようになりました。Hと妹も教会に通う子どもでした。教会と洋服という二つのつながりで、一家は神戸に住んでいた外国人と親交がありました。この本は、そういう家族と家族を取り囲む人々の生活の記録です。

本書は、子どもの語り口で叙述されており、漢字にはすべてふりがながふってあります。妹尾さんは、子どもたちにも読んでほしいと願って、ふりがなをつけているのです。この本の中には子どもたちの生活空間としての神戸の街が生き生きと描き出されています。あのときから神戸の街は空襲で消失し、そしてまたこの間の大震災で消失しました。神戸の人たちにとっては、大空襲の後でよみがえった神戸の街と復興の途上にある現在がかさなって、特に感慨深い作品になっているよう

です。

少年Hの成長とともに次第に学校教育も行政的な指導も軍国主義的な色彩を帯びてきます。国民服の時代になると父親も洋服を縫う仕事が無くなって、消防士になります。一家がクリスチャンであったということも、父親の消防士としての仕事も、結果として当時の日本の様子を偏狭なナショナリズムにとらわれずに批判的な精神でみることを可能にしてくれたようです。私は少年Hの伸びやかな感性と偏見から自由な精神に驚かされましたが、同時に、父親の人間性にも心を打たれました。Hはいつでも「どうしてなのか」と問い返しながら自分の頭でものごとを考えてゆく自立した精神の持ち主として成長していますが、この点では父親の果たした役割が大変大きかったようです。—鬼畜米英の標語はおかしいよ、新聞はウソを書いているのかな、生きている人間が神様だなんてへんだ、バケツリレーなんかで空襲から街を守れるのかなあーなどなど、当時タブーとされていたHの疑問に、父親はわかる限り正面からごまかさないで答えています。けれども、それはこだけの話にしておきなさいよ、という具合に、父親はHを一人の自立した人格者として待遇し、また信頼もしているのです。父親の知性と人格の形成の筋道は、私には大変興味あることでした。

こんなエピソードが書かれています。一家が外国人とのつきあいが多かったので、それだけで当局から危険視され、スパイの家族とうわさされ、やがて父親は警察に呼び出されて事情聴取を受けることになります。Hの机にもスパイという字を誰かが書き、そして誰かがそれを消してくれています。Hは、アメリカからきた絵はがきを見せてやったイッチャンがしゃべったからだと思って、敵討ちをしてやろうと考えますが、父親からイッ

チャン自身もきっと絵はがきのことを人に話したことで苦しんでいるはずだといさめられます。その夜、海岸にイッチャンを呼び出したHは、二人で砂浜に寝ころんで空を見上げながら、イッチャンを責めるつもりはないよと言います。イッチャンが「机の字、これからもぼくが消したる」といったので、その時初めてこれまで字を消してくれていたのがイッチャンだったことがわかり、空を見上げていたHの目には満天の星が涙でにじんでボアボアになったのでした。たとえばこんな記述から、あの時代を懸命に生きた子どもたちの歴史がユーモアを交えながら生き生きと描き出されているのです。

『生きることの意味』の作者の高史明さんは一九三二年生まれですから、妹尾さんより二年遅れて小学校に入ったことになります。十五年戦争の発端となった柳条溝事件は一九三一年の九月におきていますから、高さんが生まれたときには戦争の

時代に入っていたのです。

高さんのご両親は、植民地化の朝鮮から日本に炭坑労働者としてやってきました。高さんは在日朝鮮人二世として山口県の炭坑街の朝鮮人集落で育ちました。一家の生活は米櫃に一粒の米もない日が続くような貧しいものでした。朝鮮人は「創氏改名」によって日本名を名乗らなくてはならなくなっていきました。少年は自暴自棄になり、乱暴者に育ってゆきます。そして、一人の教師と出会います。この本の中には、少年を本名で呼んでくれたその先生との出会い、陰気で乱暴者の少年が、明るい活発な少年に生まれ変わっていく様子が生き生きと描き出されています。しかし、担任がかわるとともに、本当の名前をいう少年は、新しい担任によって繰り返し鉄拳制裁を受けることになってしまいました。少年は再び自暴自棄になり、やがて、周囲を見返すために「みていろ、おまえたちの誰よりも立派に死んでみせるからな！」と心の中で叫ぶようになってしまうのです。

高さんの『少年の闇』（径書房、一九八三）には、その後の高さんの人生が描かれています。敗戦の混乱の中で「人間への絶望」を植え付けられた十三歳の少年は、学校を去り「悪への転落」が始まり、少年刑務所に送られます。高史明さんはこういうどん底から作家としての自己形成をしたのでした。自らのアイデンティティを手に入れるまでの軌跡はすさまじい自己との闘いであったことが作品に示されています。この過酷な成長の記録は実に深い感銘を私たちに与えます。戦争の時代は、高さんのような少年たちを苦しめた時代でもあったのです。こういう記録を読んで、私は、「子どもの権利条約」を大切にしたいという気持ちが強まってきます。

作家の山中恒さんの『ボクラ少国民』は一九八〇年に完結した「ボクラ少国民」シリーズ（全五部）の一冊として刊行されました。山中さんが四年生のときに小学校は国民学校にかわりました。この本には国民学校の時代の資料がたくさん載っていますので、戦時下の学校教育がどんなものになっていたかがよくわかります。山中さんは、〈鬼畜米英〉、〈撃チテシ止マン〉のスローガンを本気で信じ、戦争で死ぬことを生きる目的とした「ボクラ少国民」として教育されてしまったのでした。圧倒的多数の少年たちが、少年Hの対極に「ボクラ少国民」少年として自己形成していたのです。山中さんは、「日本が戦争に負けたと知ったとき、私は死んで天皇陛下にお詫びをしなければと思った」と書いています。戦争が終わってからの大人たちの様子を見ていて、「そのとき私たちは大日本帝国の少国民として敗れ、さらに信頼していたおとなの裏切りに破れ、二重に敗れた」とも書いています。山中さんのその後の生き方も、戦争中に失った自分を取り戻すものになっています。

私自身は、教育学の研究者として戦争中の教育を研究対象のひとつとしています。ようやく長いことかかった共同研究（『教育科学の誕生』大月書店、一九九七）がまとまったところで、少年Hに出会い、それが機縁となってかつて読んだ本の少年たちの生き方が自分の研究と結びついてきました。そして、人々がどう生きたのかを生き生きと描き出してくれる作品は私たちに新しい社会を目指す力を与えてくれるものだ、ということをあらためて実感させられることになりました。

（国学院大学）